

# やまと 民俗への招待

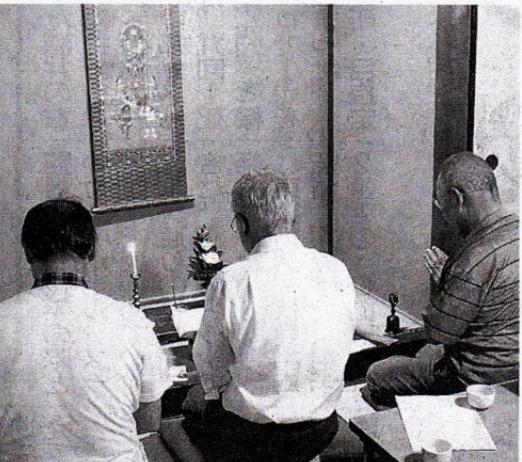
10月5日の夜、奈良市内の奈良町物語館で、中新屋町の庚申講が行われた。町内はテナントも含めて47軒ほどで、うち12軒で2カ月に1回講を営んでいた。講のたびに当番があり、2軒決められており、お供え物などを用意する。1998(平成10)年ごろまでは講員の家を持ち回りで営んでいたが、その後近くの奈良町物語館の座敷を借りるようになったという。

10月5日の夜、奈良市内の奈良町物語館で新屋町の庚申講が行われた。町内はテナントも含めて47軒ほどで、うち12軒で2カ月に1回講を営んでいる。講のたびに当番が2軒決められており、お供え物などを用意する。1998(平成10)年ごろまでは講員の家を持ち回りで営んでいたが、その後近くの奈良町物語館の座敷を借りるようになつたといふ。

画像を掛け、洗米や餅や菓子などの供物をあげ、当番が導師となつて懺悔文(般若心経(7))、南無青面金剛童子」などを唱え、最後に「町内安全、室内安全」を繰り返してお勤めは終わつた。

すぐにお供え物を下げて参会者用に分け、直会となる。たちまち賑やかな談笑が始まる。昔は、肴は今のような乾きものではなく、飲むのが楽しみな

人は午前2時、3時まで飲んでいる人もあるという。講の用具を見ると、金剛鈴の木箱には、「安政5年(1858年)」の墨書きが



## 奈良町物語館で行われた中新屋町の庚申講 =筆者提供

あり、「中新屋南組」として紺屋忠兵衛や河内屋善兵衛を始め、11人の名が記されている。中新屋の庚申講にはすでに160年ほど前の積み重ねがあった。県内には多種多様の信仰的な講集団があり、各地で共同体の結束を図ってきたが、私が県立民俗博物館にいたころ、伊勢講や庚申講を廃止したとして資料の寄贈申込みが相次いだ。県内では大和郡

市内の小泉の庚申堂が名高いが、ここへも近年講の用具の寄贈が続いている。町内と家の安全のために信仰と親睦を重ね、暮らしを守るために情報交換を続けてきた習俗は急速に変貌しているようだ。

(奈良民俗文化研究所  
代表・鹿谷勲)  
II 隔週掲載